

開催地名：埼玉県鴻巣市	
開催日時	令和 5 年 2 月 19 日（日） 15：00 ～ 16：00
開催場所	鴻巣市文化センター（クリアこうのす）
語り部	菅井 茂（宮城県仙台市）
参加者	自治会長、自主防災組織代表者、市自治振興課、市危機管理課 200 名
開催経緯	鴻巣市は、今後 30 年以内に 70%の確率で発生するとされる「東京湾北部地震及び茨城県南部地震」において、震度 5 強の揺れが想定されている。（平成 26 年 3 月埼玉県地震被害想定調査）これは、東日本大震災時に鴻巣市で観測された震度と同等の震度であり、今後これらの地震が発生した場合、又、想定規模以上の地震が発生した場合に、自治体の助け（公助）を待つことなく、市民（自治会や自主防災会）が自助又は共助により主体的に行動をしてもらう「自助及び共助の意識づくり」が課題となっている。
内容	<p>（1）大震災発生時の状況と指定避難所での運営</p> <p>東日本大震災発生時、私は南材地区町内会連合会の副会長を務めていた。2011 年 3 月 11 日の午後に発生した東北地方太平洋沖地震は、今までに体験したことのない大きな揺れだった。地震発生後、最寄りの南材木小の避難所へ駆けつけて、町内会連合会長の立場から地元地域被災者の受け入れと、津波によって行き場を失った他地区の被災者の受け入れに奔走することとなった。</p> <p>南材木町小学校では、地震が発生してから住民が続々と避難してきており、人数を把握する意味からも 20 時前に水と乾パンを全員に配り、その際に 905 人が避難していることが判明した。避難者数は最終的には 1,200 人になった。仮設トイレを北側にも設置したが、寒くて誰も使用しなかったため、翌日に急遽東側に作り直した。また、自家発電機は 2 基あったが 1 基は作動しなかった。こうしたことも、日頃からのチェックが必要であると反省した。3 月 11 日の夜、避難所運営委員会を立ち上げ、役割を分担し、ボランティアを募った。その結果、若い人が寝ずの番でトイレ番をしてくれるなど、トラブルもなく運営できた。</p> <p>私は、3 月 13 日からは八軒中学校の避難所へ移った。こちらには、近隣の住民 300 人と、津波被害を受けて孤立していた荒浜地区の津波被災者 160 人の合計 460 人の避難者がいた。南材コミュニティ・センターには乳幼児と母親の約 80 人が入所することになり、私たちは 3 カ所の避難所の運営に携わることになった。避難所は避難した人たちのホームである。地区の代表者を係に決め、少しでも住みやすい環境を作るために、ルールを守れない避難者には退所してもらおうと伝えるとともに、希望や不満を伺った。</p> <p>振り返ると、避難者に対して避難所内の決まりごとを周知して、実際にそれらを遵守してもらったことが、トラブルもなく快適に運営できた要因ではないかと思う。具体的には、避難所内では「禁酒」、「禁煙」とし、避難所の起床時間は 6 時半、朝食が 8 時、夕食が 17 時として、1 日のスケジュールを明確化した。そしてごみの分別（燃えるゴミ、プラスチック、ペットボトル）とトイレの管理（各自美化清潔を心掛ける）、節水について周知徹底を依頼するとともに、所内玄関以外からの外出を禁止し、これらのルールを避難所内 4 カ所に掲示した。</p> <p>また、八軒中学校合唱部は、3 月 19 日の全国大会に出場予定であったが、新幹線も不通となっており参加できる状況ではなかったため、武道場で、父兄及び避難者対象に合唱してもらった。この光景が様々な形で報道され、辛い避難生活の中での明るい話題として心を和ませてくれた。</p>

	<p>(2) 在宅被災者と災害弱者対応</p> <p>避難所に滞在している人には食事を支給できるが、自宅にいる住民（避難所に来れない方々）への食事の支給方法についての問題が存在する。我々は在宅避難者に対して、ライフラインが完全に復旧するまでは全員に対し支援を行うこととし、復旧してからは自宅から移動できない住民にのみ、食料・物資・医療等の支給と援助を行った。また、災害弱者への対応については、南材コミュニティ・センターを補助避難所として、災害時要援護者や災害弱者に特化した避難所として運営することで、彼らの生活環境を守った。</p> <p>(3) 震災経験を踏まえて</p> <p>避難所運営がスムーズに行われたのには要因があった。まず1つは、平成17年から地域で総合防災訓練を実施していたことである。平成19年からは避難所となった八軒中学校とも連携し、同校で防災訓練を行っていた。東日本大震災の2日前にも、同年の防災訓練について打合せをしたばかりであった。さらに、地区の昔からの住民とマンション住まいの新住民が、小学校の諸行事を通じて互いに顔見知りになっていたことも大きい。こうした諸行事は、地域の人が出会う良い機会になる。</p> <p>震災後も、「防災訓練」をひと工夫して、様々な世代に防災の重要性を認識してもらうことをテーマに活動を継続している。学校には生徒の登校日に訓練日が重なるよう依頼していて、濃煙体験、防災クイズ大会など、参加者の防災活動経験が増えるような工夫を行っている。防災倉庫で防災装備品が故障していないかのチェックも怠らない。コミュニティ・センターでは民間企業との連携も図って、協力を得ている。地道な活動が、ひいては「自助」・「共助」のありかたを見直すきっかけにもなるかと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>「東日本大震災から学んだ地域防災」という演題で、発災後からの避難所運営や地域を巻き込んだ防災訓練の実施について、お話しいただいた。本講演を受けて当市では、自主防災組織の結成促進や活動の活性化と、児童に対する防災教育の充実化を進めることで、自助・共助の体制強化につなげていきたいと思う。</p>